The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第28回ワークショップ西洋史・大阪　報告要旨 ：2024年6月8日大阪大学
Author(s)	町澤, 竜一郎; 小林, 卓; 前野, 弘志 他
Citation	パブリック・ヒストリー. 2025, 22, p. 85-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102069
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第 28 回ワークショップ西洋史・大阪　　報告要旨

2024 年 6 月 8 日　大阪大学

1. 宝石としての養殖真珠の受容

――久米武夫の宝石研究を通して――

町澤竜一郎（大阪大学大学院）

1893 年に半円真珠を発明した御木本幸吉に、西川藤吉、見瀬辰平を加えた 3 名の日本人が、20 世紀初頭に世界で初めて真円真珠開発に成功した。その後は西川の技術をもとにした「ピース式」が業界標準の技術となり、20 世紀における日本のアコヤ養殖真珠産業は、世界の真珠市場において稀有な独占供給体制を確立した。

半円真珠の発明後、独自の技術で真円真珠を開発した「真珠王」御木本幸吉は、アコヤ養殖真珠産業を生み出した偉大な起業家として高く評価されている。その一方で、養殖真珠のさきがけであり、養殖真珠産業創始の鍵でもある御木本の真珠発明の意義や、養殖真珠が宝石として欧米市場で受容される経緯が、十分に検討されているとはいえない。

そこで本報告では、御木本真珠店に戦前在籍した久米武夫の宝石研究と、これまで見逃されてきた彼の宝石関連文献の蔵書である「Takeo Kume Library」に着目し、宝石としての養殖真珠の受容にかかわる久米の貢献と、御木本による養殖真珠発明の意義を考察した。

久米は御木本在籍中の数度にわたる海外派遣で研鑽を積み、真珠を宝石として販売促進する知識の獲得を図った。1914 年に帰国後は、御木本真珠店での宝石講座の開講や自筆本『宝石』の執筆、カタログ『真珠』を通じた宝石知識の普及、などの実践により、養殖真珠の受容促進を図った。こうした久米の宝石研究は、養殖真珠を宝石として販売促進する御木本の戦略を知識面で支え、養殖真珠が欧米市場で受容される原動力の一つとなった。

2. 属州ノリクムのウィルヌム出土青銅板とミトラス教

小林 卓（名古屋大学大学院）

1992 年にオーストリアの山中で 98 人のミトラス教徒の名前が記るされた青銅板が発見された。教徒による教義や儀礼の口外が禁止されたミトラス教では稀な事例として新たな知見の獲得が期待されたが、18 年間に亘る当信仰集団への新たな入信者の動きなどが明らかになったほかは依然として不明な点が少なくない。98 人のミトラス教徒自身についても得られる情報は限定的である。本報告では青銅板に記されたミトラス教徒の同族ら周辺にいたイリュリクム税関網の税関吏やノリクムにおける鉄鉱山の徴税請負人に注目し、これらの人物の碑文情報を

分析した。その結果、イリュリクム税関網において謂わば本部と支部の関係にあったポエトウィオとウィルヌムの間でのミトラス教徒でもあった税関吏の往来に見られるように、ミトラス教のノリクムへの伝播はポエトウィオ方面からのルートであった可能性を指摘した。また良

質な鉄資源に恵まれたノリクムは鉄鉱山の開発によって経済が発展したが、その鉄鉱山事業の担い手であった複数の徴税請負人にミトラス教徒が存在し、青銅板に記されたミトラス教徒の中にも鉄鉱山事業に関わっていた人物が少なからずいたと考えられることから、神殿の修復などを行っていたウィルヌムのミトラス教の活動資金の源泉はノリクムの鉄鉱業がもたらす収益であった可能性が高いことを提示した。

3. テュアナのアポロニオス
——その虚像と実像——

前野弘志（広島大学）

報告者の関心は、古代地中海世界における魔術を理解することにある。これまで、①呪詛板の分析、②古代ギリシア語魔術パピルスの分析、③魔術師の分析を行なってきた。本報告の目的は、③の一例として、テュアナのアポロニオスを取り上げ、彼の人物像を理解することにある。方法論として、まず最もまとまった史料であるフィロストラトス『テュアナのアポロニオス伝』を中心に据え、先行研究を頼りに彼の虚像と実像を切り分ける。次に、得られた人物像と、従来の手法であるイエスの人物像との比較ではなく、報告者がかつて取り上げたアボヌテイコスのアレクサンドロスの人物像を比較する。この人物は、自らアスクレピオス神殿をオープンさせ、その神官として富と名声を獲得し、時の皇帝に書簡を送るほどの人物であった。ルキアノス『偽預言者アレクサンドス』は、そのような地位を得るために彼が実行したあらゆる秘密の戦略と詐術の暴露本である。アポロニオスの実像については未だ不明な点が多いが、アレクサンドロスとの共通点が多々あり、両者の人物像を比較することにより、相互補完的に見えない部分が見えてくる。予想される結論として、アポロニオスの虚像の背後にはフィロストラトスの姿が透けて見え、アポロニオスの実像にはアレクサンドロスの姿が二重写しに見えるだろう。

4. 14 世紀後半バレンシア王国北部における領主支配と村落共同体

足立孝（九州大学）

バレンシアのフエロを共通法に固有の王国をなしたバレンシア王国の北部には、アラゴンのフエロを梃子に独自の入植運動を展開したアラゴン貴族の大所領が卓越する空間が生み出された。両王国の境界に位置するアレノス家のバロニア、なかでもその筆頭集落であるビリャエルモーサは同一の法、共同体編成、貨幣種ならびに度量衡に支えられ、王国はおろか領主をも違えるアラゴン王国最南端の隣接諸集落ときわめて濃密な社会経済的浸透を享受したのである。だが、14 世紀後半には、デニア伯の巨大な所領群の一つと化して宮廷所在地ガンディアを中核に中央化が図られた領主財政機構の一部を占めることになったうえ、1356 年開戦のカスティーリャ戦争のさなかで発達を遂げた各王国議会代表部を事実上の王国統治府として、各

王国の政治的一体性が否応なしに強化されてゆくという事態に直面した。もっとも、例外的に伝来するバロニアの 1359、61、64 年の会計記録は、まさしくそうした事態を随所に反映しながらも、バロニア、わけてもビリャエルモーサがアラゴンのフエロを根拠とする一定の自立性と同王国南部との歴史的な一体性をけっして失わなかったことを示している。かつてのアレノス家の領主支配の「中心」は確かにデニア伯のもとでその「辺境」と化したが、だからこそ、その掌握のためには、従来の法に支えられた一定の自立性が尊重されなくてはならなかったのである。

5.「本国」から戻ったカリブ海移民

――永住帰国者 (Returnees) たちの違和感と責任感――

堀内真由美（愛知教育大学）

本報告のタイトル「カリブ海移民」とは、「ウィンドラッシュ世代」と呼ばれる、1950-60 年代に当時の英領カリブ諸島からイギリスの労働力不足を補填するため海を渡った、多くがアフロカリビアンの若者だった。かれらが本国で直面した差別と抑圧の現代史は知られているが、かれらの次の世代、「ウィンドラッシュ二世」たちが学校の内外で厳しい、ときに暴力的差別を受けたことはあまり知られていない。本報告では、「ウィンドラッシュ世代」と「二世」から一人ずつ、報告者が聞き取りをした内容をもとに、かれらの本国での経験と、社会を覆う人種差別主義への絶望から故郷の島に永住帰国した経緯、帰国後の故郷で抱いた違和感や孤立感、それらを乗り越えんと自らの義務と課し実践したことなどを紹介した。

ドミニカ出身のフランクリン・ジョージズ（1937-）と、ジャマイカ生まれで両親から呼び寄せられたベヴァリー・ブライアン（1949-）は、それぞれ苦労の末、区議会議員と基礎学校教師として懸命に働いたが、変わらぬ「敵対的な環境」に絶望し永住帰国する。故郷では両者とも、自尊感情を高め差別への抵抗力を身に着けるための教育に注力したが、本国での経験を共有することが難しいことにも苦悩した。その背景には、かれらが海を渡った同時期すなわち独立前後の混乱期を島に残って過ごした同世代人らとの間に、経験と記憶の分断が生じてしまっていたことがある。今後は後者の人々の体験を紐解き、両者分断の根源となった植民地主義の残滓の全貌を明らかにしていきたい。